

民医連鋼領より

私たち民医連は、
無差別・平等の医療と、
福祉の実現をめざす
組織です。

高原新聞

高原新聞発行所：高原デイサービスセンター
発行人：藤井翔伍 発行日：2020年10月12日(月)

高原デイサービスセンター
京都市左京区田中高原町 26
075-706-6507
Fax 075-706-6715

大作「紅葉」



みなさま、いかがお過ごしでしょうか。今年には命の危険を感じるほどの暑さが続き、ようやく秋が訪れようとしています。ここ高原デイサービスセンターでも、ご利用者さまと共に「故郷」や「旅愁」を歌い、季節を肌で感じている日々です。

上記、「紅葉」という作品は、約3カ月という期間の中で、職員とご利用者さまが丸くなって取り組んできました。何か一つの作品を、みんなで協力して作り上げること。その大きな課題に、協力して下さったご利用者さまに感謝を申し上げます。そして、今後も大作に取り組んでいく中で、感動と喜びを。

藤井 翔伍

更け行く秋の夜 旅の空の
わびしき思いに
ひとりなやむ
恋しや故郷 懐かし父母
夢路にたどるは
故郷(さと)の家路



無理なく、できるのがいい!

切るのは私に任せて!

ちょちょいのちょい。

セッション

完成が楽しみ!

大澤ですが、何か?

これが目に入らぬか。

素敵な紅葉でしょ。

楽しいわ。

高原デイサービスセンター理念

- 1 何でも話し合えるアットホームな環境作り努めます。
- 2 地域社会において自立した生活が行えるよう利用者一人ひとりのその人らしさ(個性)を尊重し、利用者様に寄り添った介護を実践します。
- 3 安全で安心な質の高いサービスを提供できるよう常に学習意欲を持ち、スキルアップを図ります。
- 4 地域とのつながりを持つことで、信頼のあるデイサービスを目指します。



7, 8, 9月のお誕生日の方々です。
おめでとうございます！



別に君を求めてないけど 横にいられると思ひ出す。
君のドルチェ&ガッバーナのその香水のせいだよ〜♪



Happy Birthday ! !

仏師

いつも安全運転に努めていますドライバーの松田と申します。今回、私が紹介させて頂くのは、「木彫り」です。今から10数年前に興味として始め今日に至ります。彫刻刀を使って木を彫っている時が、自分にとつての至福のひと時です。そもそも、私は若い頃にデザインの仕事を長年してきたこともあって、その時に培われた発想力や想像力（創造力）といったものが、この趣味の木彫りに活かされているのだと思います。ところで、私の弟子である藤井（介護職員）も、最近木彫りを始めました。彼は彫刻刀を握るのが小学生以来と云っていたのですが、いざ彼が彫った「お地藏さま」を拝見しますと、初心者が彫ったとは到底思えないものでした。彼は、何においても無限の才能を秘めており、千人に1人の逸材ではないかと勝手に思っています。



作業グループ頑張ってます

こんにちは。作業グループの大澤です。上記の写真は、何をしているところでしょうか。これは、志村けんのバカ殿を真似ているところ…ではないです。（笑）実は予定している企画の様子を載せさせて頂きました。まずは、グループの中で何をするか話し合うところから始まります。それが決まれば、次のステップとして、試作品を作り、それを職場で共有します。ちょうど、この上の写真は、その試作品作りにあたります。この時は、絵の具で手や足、顔を白く塗り、それを色画用紙に移しているところです。副主任の藤井さんの善意で体を張ってもらいました！（※みなさんは、絶対に真似をしないで下さい！こんなことするのは、藤井さんだけでいいのです！）

もちろん、私や看護師の田辺さんも手や足に白色の絵の具を塗って、試作品を作ってみました。特に足の裏に筆で塗っている時は、こそばくて笑いが止まりませんでした。こうして、ご利用者さまに提供する作業が出来上がっています。これからも、楽しい企画をどんどん考えていきますので、楽しみにしていただければ光栄です。みなさん、光栄に向かってゴクしまししょう！

家庭的な雰囲気

高原デイサービスセンターでは、長年にわたって家事をしてこられた女性ご利用者さまに、洗濯物干しや洗濯物たみ、それから洗剤、広告でゴミ箱作りなどをお願いすることがあります。中には、男性ご利用者もおられます。もちろん、職員からの「依頼」ではなく、ご利用者さまの「思い」を最優先に考えています。

長年の経験は何よりもの財産

左下の写真は、女性ご利用者さまお二人が洗い物をしてるところです。その経緯は、女性ご利用者さまから率先して、「洗い物しますよ。」と職員におっしゃられました。私たち職員一人ひとりが、介護の仕事に携わる中で、大切にしていくこと。その一つとして、その方の「主体性」を最優先に考えることだと思っています。この時も、お二人仲良くおしゃべりしながら洗い物をされています。それを傍から見ていて感じたことは、長年の経験って何よりもの財産だなという事です。まさに、お二人の手つきが、それを物語っていました。ちなみに、私藤井も妻の顔を窺いながら、洗い物を日々実践しています。



日々是好日

今年は、コロナ禍の2020年(令和2年)ですね。娘(中学校3年)が、この春に延期となっていた修学旅行に8月下旬、長崎県へ出かける事が出来ました。一生に一度の中学生の思い出ですね。とても喜んでます。

私の思い出話を一つ紹介します。私が20代の頃のバスガイドの仕事の話からです。昔は、長野県の修学旅行といえば、バスに乗って3日間、奈良・京都を回りました。自由行動のない時代でした。決まって3日目は、比叡山に上り、夕食後は静寂の山で生徒たちが大合唱。“大地讃頌”を歌い、京都駅から夜行列車で長野へ。長野オリンピックより前な時代です。大地讃頌は沢山の学校が数知れず歌いました。長野県須坂市の某中学校は、1校だけ歌のあとに植樹をしました。小さな苗木です。次の週、比叡山に行くと、「こないだの学校さんね。」と苗木を見ていました。それから歳月が流れ、10年後には、「大きくなったなあ。」と、見ていました。20年後には、お客様と比叡山に行く機会があり、あの苗木は大地に根を張り、赤い花を咲かせて、凛とし、言葉にならない感動をいただきました。延暦寺根本中堂の入り口が左前方に見える坂道に差し掛かる右側に、実生と書いた石碑に1990年(平成2年)と書いてあります。あの時の植樹にご一緒でき心温まる思い出をいただいたのは、むしろ私でございます。朝から夕方までよく見る比叡山。あれから今では30年の月日が経ち、あの頃の学生さんは、40歳前半ば：人と人のつながりや出会いに気付かされては、ご縁とはありがたいと思います。



このあたりです。

きみに読む物語

こんにちは。介護職員の國西です。私ごとですが、ここ高原デイサービスセンターに勤め始めて、気づけば1年と4カ月が経ちました。これまで介護の経験がなかった私を、職場の先輩やご利用者さまに支えられて、一歩ずつ成長することができました。もちろん、これからも目標である実務者研修を取得し、介護職員としてのさらなるスキルアップを目指していきたいと思っています。この場をお借りしまして、本当にありがとうございます。

それから、秋の夜長に是非見て頂きたい映画をご紹介します。今から15年前の2005年に上映された「きみに読む物語」という映画です。この映画は、アメリカで作られた作品になります。そして、この映画の主人公である初老の女性は、何らかの原因で記憶喪失となり、療養施設で暮らしていました。その女性の元に、一人の男性が訪れます。その男性は、女性にある「物語」を読み聞かせます。その物語は、1940年代アメリカ南部の町で良家の子女アリーと地元で貧しい青年ノアの間で生まれた純愛物語。



國西 由加子



映画『僕は猟師になった』

「猟師にならへんか？」お正月のある日、八条口のお好み屋さんで隣に座っていたオツチャン(猟友会の方)が唐突に勧めてくれたことがありました。

(猟師かあ。罾を仕掛けてかかった獲物を狩る、でも罾にかけるとかちよつと卑怯な感じがしてあんまり好きじゃないなあ)と思ったのであまり気が進まない旨をお伝えしましたが、『猟師』『罾師』というキーワードだけは強く心に残りました。

それから半年ちよつとを経て、罾師の映画を観ることになるとは。そして思い知るようになるのです。自分の先入観とは打って変わって、スクリーンに映し出される罾師の現場の光景。これが超真剣勝負。罾を仕掛けるにも、山を仔細に観察し、猪や鹿の足跡や糞等の痕跡を頼りに、獲物の群れの規模や習性、通り道などを正確に見極め、ここぞという場所に罾を仕掛けます。落ち葉をかけてカモフラージュしたりと、工夫を凝らしますが、ほんの僅かでも不自然さがあれば、その違和感、人間が罾を仕掛けたという自らの死に直結する危険な気配を敏感な野生動物は即座に感じ取り罾の直前で踵を返してしまうのです。物凄い知恵比べ、冷や汗の出るような水面下の闘いがそこにはありました。そして、うまいこと罾にかけることができた後は、ある意味もつとたいへん。木の棒を木刀のように脳天に振り下ろし気絶させなくてはならない。大きなイノシシが、殺されまいと、全力で立

ち向かってきます！罾にかかっているのは

実質脚一本だけで他の脚は自由、意外と広範囲に動けるため、気が抜けません。仮に罾のかかりが浅かった場合、動いた時の勢いで、罾が外れてしまうこともあり、その時は猟師が大ダメージを食らってしまうことも。まさに命の取り合いで、真剣勝負の緊迫感が映像からヒシヒシと伝わってきました。なんとか気絶させた後はとどめを刺して、ホツとするのもつかの間、重たいお肉をずるずると引き摺って籠まで運びます。

映画の中で印象的だったのは、ただやみくもに狩るのではなく、必要以上に狩らない、狩ったお肉は皆で分ける、等のルールを設け、それらをしっかりと守りながら、とても楽しそうに暮らしておられたことです。自然に対する敬意、礼儀や節度、また、人間として生きる意味が感じられ、とても魅力的でした。動物の命を奪うことには賛否両論あると思いますが、植物も含めて、生き物の命をいただいで生きている者として食べ物を無駄にせず感謝していただくことの大切さを教わったり、一方では、自分勝手な先入観や偏見で判断してしまう浅はかさや思い知らされたりしました。また、鴨川で鮎魚をされていたご利用者さんと話が盛り上がったりと、この映画を観ることで、少し世界が広がったような気がします。テレビ放送でも話題になった京都の猟師千松さんとそのご家族のドキュメンタリー。個人的にも今年一押し

の映画です！出町柳の映画館「出町座」にて絶賛上映中！



高山裕介

手形ダマ

